Wat Pā Däng 派の成立に関する小考（3）

古　山　健　一

1．はじめに

筆者は本論集において、これまで「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考」［古山 2019.］及び「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考（2）」［古山 2020.］と題する、2つの論考を寄稿した。これらにおいては、Wat Pā Däng 派[(1)]の中で語られてきた同派成立についての同派の認識や、先行のスリランカ系僧派である Wat Suan Dòk 派に対して後行の Wat Pā Däng 派がなした自派の正統性に関する主張についてを、同派内で編述された2つの史書、すなわち、*Jinakālamālī*[(2)]（パーリ語。※以下 Jkm と略記）と Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*[(3)]（*ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดปาแดง*、北部タイ語。※以下 MS.CP と略記）の記述をもとに論じた。2019年の論考では同派成立の立役者と言うべき Mahādhammagambhīra 師（※ Jkm の人名表記。MS.CP のそれによれば Mahāñāṇagambhīra 師）のスリランカ渡航についての語りを、2020年のそれでは同師のスリランカ渡航以前の行状についての語りを、各々の主たる論点として小考を加えた。

本稿はこれらの続編である。やはり同じく上述の2つの史書の語りに依拠しながら、この「Wat Pā Däng 派」なる僧派の形成過程の最初期についての語りに論点を移し、引き続き同僧派の成立について考察してみたい。なお、ここに言う「最初期」とは、彼ら修学僧がスリランカを発ってからチエンマイに帰着し、Wat Pā Däng に止住して同地で授具足戒式を執行し始めるまでの期間としておきたい。

前の拙稿の中でも既に述べていることではあるが、ここで依拠する2つの史書は、Jkm は A.D.16c の初頭に撰述されたものであり、MS.CP のほうは A.D.17c の初め頃に編まれたと推定されるものである。Wat Pā Däng 派形成の最初期は大雑把には A.D.15c の前半期と見ることができるが、そうすると、Jkm の述作はその時期から100年程後のことであり、MS.CP の編述に至っては少なく見積もっても約200年も後のことである。これらが編まれた場所は、Jkm のほう

はチエンマイと考えて差し支えないが、MS.CP はチエントゥンのようである。言うまでもなく作者は同一ではないし、その作者は Wat Pā Däng 派形成の最初期に生きていてその時期の諸々の出来事に関与した当事者でもない。つまり両史書は、Wat Pā Däng 派形成の最初期の状況を把握するための貴重な材料ではあるが、いわゆる「一次史料」ではない。その語りは、あくまでも、Wat Pā Däng 派が形成され始めた当初から 100 年や 200 年を経過した時期 ― Jkm であればラーン・ナー地域でこの僧派が一定の地位を得るに至った後の時期（しかし Wat Suan Dòk 派は健在）、MS.CP であれば先行のスリランカ系僧派である Wat Suan Dòk 派のチエントン枝派との諍論に「勝利」したことになり、かつこの枝派が既に消滅した後の時期 ― における伝聞や歴史認識、自派に関する主張などを紡いだものである。故に、この両書における Wat Pā Däng 派形成の最初期についての語りを、何らの検証なくそのままで「史実」と見做すわけにはゆかないだろう。仮にこれらが「一次史料」であったとしても同じ注意を払わなければならない。

また、これもまた前稿において示してきていることであるが、この 2 つの史書は、同一の出来事についての語りであっても相違している部分がかなり多く認められる。ここで考察を加える Wat Pā Däng 派の形成過程における最初期についての語りも、Jkm と MS.CP とでは差異がかなり大きい。筆者（古山）としては、そうした異なる語りのうちでも、双方に共通的あるいは類似的な部分は、「史実」であるかどうかはさておき、地域や時期、史書述作者の違いを飛び越えたところの、この僧派において普遍的な伝聞や歴史認識、自派に関する主張などであろうとひとまず考えている。彼らに僧派的な紐帯の如きものがあるのであるとすれば、同派における斯様な普遍的な伝聞や歴史認識などがこれを支えている 1 つとして挙げられるであろうし、それは Wat Pā Däng 派とはいかなる僧集団であるのかを大枠で理解する上での手掛かりにもなるであろう。なお、異なる語りに対して牽強付会して同じような内容のように読もうとする解釈や、一方の語りの行間を他方の語りで安易に埋めるようなことは、厳に慎まなければならないことは言を俟たない。

この小考もまた研究ノートに類するものであり、相も変わらずラーン・ナー仏教史のうちの些細な断面を切り取って戯れるが如きものに過ぎないが、該地域の仏教理解を深めるのに多少なりとも役立つことができるならば幸いである。至らぬ点は多々あろうかと思うが、斯様なところについては識者諸賢のご

批判とご叱正を乞いたい。

2. Jkm の語りにおけるスリランカを去った後の動き

初めに、Mahādhammagambhīra 師らがスリランカでの修学と再授具足を終えて同地を発ってからチエンマイに到るまでの動きについてを見てみたい。

ここではまず述作期が比較的古い Jkm の語りを見てゆきたいが、その前に、その前段部［Jkm. pp.92-93］での語りについて、すでに前稿［古山 2019.］の中で述べてはいるが、改めて触れておきたい。

まず、彼らスリランカ修学僧たちであるが、察するに僧団儀式におけるパーリ語読誦の問題点を改めるため、当時のスリランカでおこなわれていたパーリ語の “akkhara-paveṇi”（パーリ語字音体系の慣用）と、これに随ったパーリ語の “pada-bhāṇa” 及び “sara-bhaññ a”（併せて、言わば「読誦法」）を学ぶために彼地に渡航した。Jkm によればこれが彼らの主たる修学目的と言え、MS.CP にも同様のことが語られている。この彼らの目指したところを、ひとまず端的に「パーリ語改革」と呼んでおきたい。「パーリ語改革」を志してスリランカへ渡航した比丘は総計 33 名であり、その大半は Mahādhammagambīra 師などチエンマイに住する僧であったが、下カンボージャ王国に住まう Mahāñāṇasiddhi ら 8 名の大長老も含まれていた。付言すると、Jkm では、スリランカにおいて、彼らはミャンマー南部 Rammana の住人である 6 名の大長老と共に先述の “akkhara-paveṇi” を学んだ、とも語られていた。こうしたことは、史実かどうかは別として、少なくとも Jkm 述作者の認識として、この「パーリ語改革」の必要性というものは、当時においては、チエンマイという局部に限られた問題であったのではなく、周辺の諸ムアン（เมือง）にも当てはまる問題、やや大げさな言い方をすれば、汎インドシナ半島的なテーラヴァーダ仏教の問題であったということを暗に語っているように思われてならない。

なお、Jkm の語りによれば、Mahādhammagambhīra 師らのスリランカでの修学期間は僅か 4 ヵ月ほどであった。托鉢に難儀する恐れがあったため、すなわち飢饉が発生したことにより、長期滞在をあきらめ、4 ヵ月ほどで同地を去ることにしたのである、と言う。この滞在期間中に再授具足以外に彼らがなしたことは、先述来の “akkhara-paveṇi” の学習と仏教聖地の巡拝であった。Jkm はそれら以外に何かをしたということは語っていない。4 ヵ月という期間であれ

ば然りであろう。彼らがスリランカからもたらしたものとは、Jkm の語りにのみしたがう限り、礼拝用の仏舎利（jinavaradhātu vandanatthāya）のほかは、スリランカで実体験して習得したであろう授具足戒式の作法と、この “akkhara-paveṇi” についての知識及びこれに随ったパーリ語の読誦法を挙げる以上のことはできない。MS.CP が言うように仏典写本や仏像、菩提樹なども持ち帰った可能性も考えられなくはなく、特にパーリ語文典類は持ち帰った可能性が高いように思われるのであるが、Jkm の語りではこれらへの言及はない [(4)]。それでも、そもそも彼らが「パーリ語改革」を主たる目的としてスリランカに渡ったということなのであれば、もたらしたものが “akkhara-paveṇi” の知識だけであっても十分にその目的は果たしえたということなのであろう。

余談になるが、彼ら修学僧らがスリランカにおいてスリランカの言語やパーリ語で会話することができたのか、はたまた通訳が介在していたのか、滞在中の言語に関する事情のことはまったく分からない。

斯くして帰郷の途に就いた Mahādhammagambhīra 師らであるが、帰路における動きについては、“Sīhaḷasāsanāgamana”（スリランカ仏教の到来）と題される Jkm 第 23 章の中で次のように語られている。

> …船で帰路に就いているときのこと、海の只中で、Brahma 長老と Soma 長老と出会った。彼らは、2 長老をも海の只中で授具足させて、Ayojjha 都（※アユタヤ）においては Ayojjha の君主 Parama 王の妃の師（garu）たる Sīlavisuddhi 大長老と、Saddhammakovida 長老とを授具足させた。伝えによれば（kira）、彼らは最初の雨安居を海の中の船において〔過ごし〕、Ayojjha 都などにおいては、2 年目の雨安居も、3 年目の雨安居も、4 年目の雨安居も、5 年目の雨安居も過ごした。それから、Sajjanālāya（※シーサッチャナーライ）に行き、そこで Buddhasāgara 長老を授具足させると、後に Sukhodaya（※スコータイ）へやって来て、6 年目の雨安居をそこで過ごした。師の入滅後 1974 年、Sakkarāja 暦 792 年、戊年（kukkura-vassa）、Mahādhammagambhīra 長老と Mahāmaṅgala [(5)] 長老を上首とする彼ら諸長老たちは、Nabbisi 都（※チエンマイ）に到着し、Rattavana-mahāvihāra（※＝ Wat Pā Däng）に住まった。…［Jkm. pp.93-94；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.131］

Mahādhammagambhīra 師らは、船で帰路に就き、授具足後第 1 年目の雨安居を海上を航行する船内で過ごした。そして、この船中にあった時に、Brahma 長老と Soma 長老に出会い、この 2 長老に授具足を受けさせた、と言う。この

船上での授具足戒式の執行が最初の雨安居の前なのか後なのかということや、この 2 長老の素性や海上で出会った経緯といったことについては、Jkm は詳らかに語っていない。

ところで、ここに 1 つの疑問が生じる。これは、その後の Ayojjha 都などでの授具足戒式についても同じく懐かれるところの疑問でもある。と言うのも、授具足戒式は、その最初に “paṭhamaṃ upajjhaṃ gāhāpetabbo” と訓誡されるように、必ず前もって和尚（upajjhāya）となる比丘を決めてから執行しなければならない。そして、パーリ律の規定によれば、雨安居歴 10 年以上の比丘でなければ授具足をおこなうことも依止（nissaya）を与えることもできないため（Cf. *Mahāvagga-pāḷi* B^{e} pp.74ff.）、それ以下の雨安居歴であれば和尚を引き受けることができない。

ここで問題となるのは、この船上での授具足戒における和尚は誰であったのかという点である。と言うのも、Mahādhammagambhīra 師らは、スリランカでの再授具足戒で従前の雨安居歴がリセットされているはずであるからである。「カルヤーニー戒壇碑文」を見ると、A.D.1476 年に執行されたミャンマー南部の比丘たちへの再授具足戒式の際のスリランカ側の対応として、〈…Sīhaḷa 地域の大長老たちとしては、以前に他の場所からそれぞれやって来た比丘たちに授具足を与える時の慣行にしたがうのが相応しい。彼ら 44 名の Rāmaññaの比丘たちを在家者の状態に置かせ、再び Vanaratana 大長老が袈裟の授与、帰依の授与により出家させて、沙門地に置かせた〉［Kalyani-Isc. p.25］と述べられている。つまり、まず還俗させてから、沙弥出家をさせ、比丘授具足戒式を行うのである。故に、もとの比丘の雨安居歴はゼロに戻ることになる。この 50 年程前に行われた Mahādhammagambhīra 師らの再授具足でも「慣行」は守られ同じ差定で執行されたであろう。そうであれば、帰路の船において 2 長老と遭遇した時点では、新たな雨安居歴がまだ 1 年あったかどうかという立場であるから、この授具足戒式の場で、彼らの誰かが和尚となることはできないはずである。もしも、再授具足を終えたばかりの Mahādhammagambhīra 師ら一行のうちの誰かが和尚となったのであれば、それは律に反することになるであろう。このチエンマイに到着するまでの帰路における一連の授具足戒式とは、どのように執行されたものであるのか、Jkm の上引箇所では詳しく語っておらず、不審な点が残ると言えよう。

ここで着目すべきは、Jkm が、上引箇所の少し前のところ［Jkm. p.93］において、Mahādhammagambhīra 師らはスリランカを発つ直前に「和尚の確保」

（upajjhāya-bhāva、※英訳は "*function as preceptors*"）のために同地の僧団に雨安居歴 15 年の Mahāvikkamabhāhu 長老と雨安居歴 10 年の Mahā-uttamapaññа 長老を乞い求めた、と述べていたことである。もしかすると、これはその後の授具足戒式の執行において和尚の役割を担う比丘を用意するためのことなのかもしれない。Mahādhammagambhīra 師らの和尚は Dhammacārin（または Dhammācariya）師であると語られているから［Cf.Jkm, p.93］、上記 2 長老が彼らの和尚として確保されたとは考え難いのではないかと思われる。多分、別の目的で確保された和尚であろう。この解釈が妥当であり、かつ帰路の船上での授具足戒ほか、彼らが雨安居歴 10 年に達するまでの期間になされた授具足戒に非律的な部分はなかったということなら、このスリランカ比丘と考えられる 2 名の長老が帰路及びインドシナ半島上陸後もしばらく彼らと共にいて [(6)]、授具足戒式に際しては名目上はこの両長老が和尚となった、と考えるほかない。Jkm ははっきりと「同行した」とは語っていないが、このように考えなければ、彼らは非律的な僧団儀式を平然とやっていただけという内容の語りになってしまうだろう。となれば、Wat Pā Däng 派形成の最初期における授具足戒式というのは、このスリランカ比丘 2 長老との *collaboration* によって執行され、彼らの存在によってその如律性が支えられていたということになるであろう。こうした状況を招いた要因は、ひとえに Mahādhammagambhīra 師らの修学期間が僅か 4 ヵ月に過ぎなかったというところにある。

ちなみに、後にまた触れるが、MS.CP のほうには、スリランカ出発前に雨安居歴 10 年以上の長老を乞い求めた話や、帰路の船で授具足戒式をおこなったという話はない。

話をもとに戻すと、Mahādhammagambhīra 師らは、インドシナ半島のどこかに上陸した後、一目散にチエンマイに戻るということはせず、第 2 年目から第 5 年目の雨安居を Ayojjha 都（アユタヤ）などで過ごした。3 ～ 4 年の間 Ayojjha 都に逗留し、ほぼ同地で雨安居を過ごしたようであるが、この期間に、Ayojjha の君主である Parama 王 [(7)] の妃の師 Sīlavisuddhi 大長老と、Saddhammakovida 長老に、それぞれ授具足をおこなった、と言う。Mahādhammagambhīra 師らが Ayojjha に長逗留した理由や、上記の 2 長老が再授具足を受けることになった経緯などは、Jkm には語られていない。しかしながらそれらは、たんなる偶然の出来事ということではなかったであろう。スリランカとの往来には Ayojjha の王家や僧団から大小様ざまな便宜を受けて義理もあったことであろうし、一

行の中にはそれらとの縁故や伝手のある比丘も含まれていたかもしれない。そして、彼らの目指す「パーリ語改革」はチエンマイの僧団のみにおける問題とは受け止めていなかったようであるから、Ayojjha の僧団内にも同種の問題が横たわっていたと見られていたのであれば、何かなしうることをしようと考えたかもしれない。あるいは、チエンマイに入る前に、和尚または阿闍梨への依止（nissaya）の期間（※通常は 10 年、一定条件のもと 5 年に短縮できる）を完了させるため、Ayojjha に留まり続けたということも考えられなくはない（※なお、依止の期間中であっても旅行中は中断が認められている。しかし、チエンマイに帰着して旅行が終われば必要となる）。ホー族の侵入などラーン・ナーの状況も勘案されたのかもしれない。

Mahādhammagambhīra 師らは、恐らくは第 5 年目の雨安居の後かと思われるが、Ayojjha 都（アユタヤ）から Sajjanālaya（シーサッチャナーライ）に移動した。そこでは Buddhasāgara 長老に再授具足を受けさせた、と言う。そして、彼らは少し移動し、第 6 年目の雨安居は Sukhodaya（スコータイ）で過ごした。スコータイでは授具足戒式の執行などはまったくなされなかったのか、逗留中の出来事については何も語られていない。

斯くして彼ら一行はようやくチエンマイに辿り着くのであるが、インドシナ半島上陸後相当な期間をチャオプラヤー流域の諸ムアンで過ごし、小規模ながら授具足戒式を執行したため、彼らが学び取ったスリランカ僧団の流儀は、一応これら “Syāma-vaṃsa” [8] の諸ムアンにも伝えられることになった。その史実性はさておき、Jkm はそう語っている（なお、下カンボージャ王国に住まう僧たちの消息は不明である）。

仏入滅後 1974 年に当たる C.S.792 年の戌年（kukkura-vassa：A.D.1430/31 年）に、Mahādhammagambhīra 長老と Mahāmaṅgala 長老を上首とする僧らは Nabbisi 都（チエンマイ）に到着した。スリランカでの再授具足が仏入滅後 1968 年に当たる C.S.786 年の辰年（mahoraga）とのことであるので［Cf.Jkm. p.93］、チエンマイ帰着はそれから大凡 6 年後ということになり、スコータイでの雨安居の後は、どこかに長逗留することはなくほぼそのままチエンマイに向かったものと、ひとまず解すことができよう。そして彼らは “Rattavanamahāvihāra”― タイ語で言うところの Wat Pā Däng〔Luang〕[9] ― なる寺院に住した。

Jkm は、この記念すべき彼らの帰国をまったく華々しく語っていない。チエンマイに到着して “Rattavanamahāvihāra” に住まった、と実に素っ気ない語り方

しかしていない。彼らの帰着を王家や高位の誰かが出迎えたり、彼らの住処を設えたなど、そうした語りは一切ないのである。

それにしても、彼ら一行がチエンマイに到着した後に止住したとされる、この “Rattavanamahāvihāra” すなわち Wat Pā Däng についてを、しかも Wat Pā Däng 派の拠点となる寺院であるにもかかわらず、この僧派の史書にして、かつこの寺で書かれた Jkm が何も語っていないというのは、実に奇妙なことである。いったい Wat Pā Däng とはどのような寺院であったのか。このことについては、後の節において別に論じてみたい。

3. MS.CP の語りにおけるスリランカを去った後の動き

次に、MS.CP における対応箇所の語りを、手短に見てゆきたい。MS.CP においては、第 13 章から第 18 章までの語りが、スリランカ修学僧たちの帰路における出来事の語りになっている。

これら章の語りを概観する前に付言しておくと、MS.CP におけるスリランカ修学僧たちについての語りは、Jkm のそれとは相違する点がかなり多く見受けられる。

まず、彼らの修学目的がチエンマイ僧団の「パーリ語改革」であると見做しうるあたりは Jkm と共通しているのであるが［Cf. 古山 2019.］、この修学僧らのリーダー格である僧の名は “〔Mahā-〕Dhammagambhīra” ではなく “〔Mahā-〕Ñāṅagambhīra” となっており［Cf. 古山 2020. p.235 註（14）］、一団を構成したメンバーは、Ñāṇagambhīra 師の師匠である Wat Suan Dòk 派の大物長老 Dhammakitti 師が指名したチエンマイ都南郊諸寺の比丘 6 名と、往路に立ち寄ったアユタヤで同地の高僧 Dhammagambhīra 師の命により加わった比丘 5 名としている。Jkm が挙げているメンバーの名と一致が確認できるのは、〔Mahā-〕Medhaṅkara 師と〔Mahā-〕Ñāṇamaṅgala 師のみである（※この 2 僧がメンバーであることは確実かと思われる）。下カンボージャ王国に住まう僧たちはメンバーに登場しないし、スリランカでミャンマー南部の僧たちと共に学んだという話もない。

そして大きな相違点はスリランカでの滞在期間である。Jkm も MS.CP も彼らがスリランカで再授具足を受けたと語っているところは共通であるが、Jkm は滞在期間が 4 ヵ月であったと語っているのに対し、MS.CP は 5 年と述べている。彼らがスリランカへ出発した年は、Jkm と MS.CP はともに C.S.785 年と

述べているが、帰途に就いた年は、Jkm が C.S.786 年頃と見ているのに対して、MS.CP は C.S.790 年と述べている。チエンマイ帰着の年は、上述のように Jkm は C.S.792 年と語っているが、MS.CP は C.S.793 年のこととしている。当然、スリランカ修学僧たちの帰路における出来事の語りは Jkm との一致度が低くなる。

ちなみに Zinme. の「Wat Pā Däng 派史」では、出発年を C.S.785 年、修学期間は 4 ヵ月、アユタヤで 5 安居、スコータイで 1 安居を過ごしてチエンマイ帰着年は C.S.792 年、と述べている（pp.44-45）。

それでは MS.CP の語りを概略的に見てゆこう。まず、その第 13 章［MS［CP/T］. p.17; MS［CP/E］. p.91］では、Ñāṇagambhīra 師らが、C.S.790 年（= B.E.1971 年、ポーク・サン［เป็กสัน］の年）の Migasira 月に、ローハナの僧団指導者 Mahāsudassana 師から仏像、法蔵（dhamma-piṭaka）、菩提樹の枝を受け取り、関係者への挨拶を済ませると、スリランカを発ったことが語られている。彼らはミャンマー南部タニンダーイー地方の港市に向かう船に乗船して帰路に就いた。この帰路は往路と同じルートである（※往路で立ち寄った際に、帰路でも立ち寄ることを約束していた）。ミャンマー南部の港市に着くと、当地の王より歓迎を受け、その王の意向で Ñāṇagambhīra 師らは同地の僧に再授具足を受けさせることになり、再授具足に応じた僧の数は 12078 名に及んだと言う。王は、1 寺を建立し、Dhammānanda 師（※アユタヤで加わった 5 名の比丘うちの 1 僧と思われる）に寄進した、と述べられている。

先述したように、MS.CP にはスリランカ出発前に雨安居歴 10 年以上の長老を乞い求めたという話はないが、仏像や仏典、菩提樹を持ち帰ったことがはっきり語られている。また、MS.CP には海上で 2 長老に遭遇して再授具足を受けさせたという話はない。彼らが帰路にミャンマー南部を通った可能性は否定できないが、Jkm にはミャンマー南部でかなり大々的な再授具足戒式を執行したということは語られていない。

なお、この MS.CP の語りにおいても、授具足戒式を執行した Ñāṇagambhīra 師らの雨安居歴の問題があるであろう。彼らは、スリランカから和尚となることのできる比丘を伴っていないようであるから、その僧団儀式の如律性についてはかなり疑問が残る語りになっている。事の真相はさておき、Wat Suan Dòk 派僧団儀式の非律性を問題視したことが Ñāṇagambhīra 師らがスリランカ修学を志した理由であると述べる MS.CP の割には、自派が非律の烙印を押されか

ねないような語りをしているわけである。手抜かりのようにも思えるが、これは MS.CP が Wat Suan Dòk 派のチエントン支系僧派との僧派の正統性をめぐる諍論に勝利した後に編述されたことによるのであろうか。また、短期間に 12078 名もの僧を再授具足させることが可能であったのかということについても疑問が残る。かなりの潤色が加えられているか、さもなくばまったくの作り話かもしれない。

続く第 14 章［MS［CP/T］. pp.17-18；MS［CP/E］. p.92］では、C.S.791 年（= B.E.1972 年[10]、カット・ラオ［กัดเล้า］の年）の太陰暦 9 月白分 6 日目に、Ñāṇagambhīra 師らはアヨーティヤー（アユタヤ）に到着したことが語られている。同師らはまずアヨーティヤー王 Paramarājādhirāja（บรมราชาธิราช）[11] を表敬し、王は彼らのために寺院を建立した。また、王は、同地の高僧 Dhammagambhīra 師[12] に彼らの帰着を報告した。すると Dhammagambhīra 師は、すべての僧たちに、Ñāṇagambhīra 師の衆徒の中で出家する（บวชในสำนัก）ように命じた（再授具足を命じた）。Ñāṇagambhīra 師は 13 名[13] の僧団の耆宿首座（ประธานแก่）となり、同じ C.S.791 年にこの僧団は「シンハラ派（สิงหลปักขะ = P. siṅhala-pakkha）」と呼ばれ、600 の寺院が Ñāṇagambhīra 師の僧派に加入した、と言う。

スリランカ修学僧たちがアユタヤで再授具足戒式を執行したということは、Jkm の中でも述べられていた。しかし、MS.CP の語りはその規模がまったく異なり、アユタヤの僧団に影響力のある高僧の周旋を得て 600 ケ寺もの比丘らが再授具足に応じたという話になっている。そしてアユタヤに「シンハラ派」が成立したと言う。これもまた、Jkm と同じく、「パーリ語改革」の必要性がチエンマイ以外の諸ムアン（เมือง）にも当てはまる問題であったとの認識が投影された語りであるのであろうが、かなり誇張があるのではないかと考える。

第 15 章［MS［CP/T］. p.18；MS［CP/E］. pp.92-93］は、〔年を明示していないが恐らく翌 C.S.792 年の〕雨安居明けの太陰暦 2 月（เดือนยี่）のことから語りが始まる。Ñāṇagambhīra 師は、Paramarājādhirāja 王及び大臣らと面会し、チエンマイに戻りたいとの意向を伝えた、と言う。この意向を受けて、国王は数名の王臣を、アユタヤの Dhammagambhīra 師は 12 名の僧を、それぞれ同行させることにして、送り出した。Ñāṇagambhīra 師らは、同月の黒分初日にヨーティヤー（アユタヤ）を出立し、北上してソーンクウェー（ปิชสุโลก）都に入った。ソーンクウェーの太守 Bān 王（พระยาบาน）は、これを喜び、迎えに出た。Ñāṇagambhīra 師から事の次第を聞かされた Bān 王は、同師らの仏教を是認するとともに、

領内寺院の僧侶に再授具足を受けさせると述べ、同都における逗留を要請した。また、ソーンクウェーには、Trailoka（ไตรโลก）という名の mahāsāmi（大教主）の地位にあった僧がおり、「パーリ語の語音」（อัตถบาลี）[14] について尋ねるべく Ñāṇagambhīra 師のところを訪れた。その結果、Trailoka 師は自らの「字句の語音」（อัตถะพยัญชนะ）[15] が的確でないことを理解し、再授具足（บวชใหม่）に応じたいと申し出た。そしてその翌日、Ānanda 師を上首とする 3000 名の僧が再授具足を受けた。Bān 王は、比丘たちの寒季の滞在場所として寺院を建立した、と言う。

Jkm には、Sajjanālaya や Sukhodaya に逗留したという語りはあるが、ソーンクウェーで授具足戒式を執行したという語りは見られない。ただそれだけのことでは Ñāṇagambhīra 師らがソーンクウェーに立ち寄っていないとまでは言い切れないであろう。アユタヤを出立した後に短い時間立ち寄っている可能性は否定できない。しかしながら、そこで 3000 僧が再授具足したというのは潤色や誇張の類と見るのが相応かと考える。

第 16 章［MS［CP/T］. pp.18-19；MS［CP/E］. p.93］は、〔恐らく同じ C.S.792 年の〕太陰暦 7 月の第 12 日目に、Ñāṇagambhīra 師ら一行がソーンクウェーを出てスコータイに到ったというところから語りが始まる。スコータイのムアン主 Rāmarāja は、同師らが「正確な法と律の語音」（ชอบแม่นอัตถธัมมวินัย）[16] であるところのスリランカ仏教を学んでヨーティヤー（アユタヤ）からやって来た僧団であることを知り、彼らを歓迎すると同時に、同地の寺院に滞在するよう要請した。すると、ムアン主は、Ñāṇagambhīra 師から従前の経緯を聞き、ムアンの僧団主以下、比丘らをすべて集めて *Nikhādanagaṇṭhi* や *Upasampadagaṇṭhi*[17] 乃至 *Kaccāyana-byākaraṇa* 1.2 に示されるパーリ語字音に関する定則［Cf. 古山 2019. p.262］について問答をさせた。また、太陰暦 8 月白分 8 日目には、ムアンの内外から集った Nandapañña 長老と Buddhimā 長老を上首とする 7520 人の長老たちが再授具足を受けた（บวชใหม่）。また、ムアン主の勧めで、将軍・大臣や庶民ら 1000 名が Ñāṇagambhīra 師のもとで出家した（บวช、※あるいは「授具足した」とも訳せる）。その後、Ñāṇagambhīra 師ら 19 名の比丘（※内訳は不詳）はスコータイで雨安居に入った。雨安居を終えると、パーンポン（เมืองปางพน）の Suriyākara を上首とする比丘らや、チャリエン（เมืองชะเลียง）の Saṅgharakkhita を上首とする比丘らが、再授具足と「字句の語音」（อัตถะพยัญชนะ）の学びを求めてやって来た、と言う。

Jkm でも彼らが Sukhodaya に逗留し雨安居を過ごしたことが語られているが、

授具足戒式についての言及はなかった。しかし、MS.CP の語りでは、夥しい数の比丘らが彼らのもとで再授具足を受け、在俗の者も出家している。そして、スコータイや周辺地域の有力な長老比丘たちを弟子にしている。前章の語りにあったソーンクウェーでの出来事も含めると、この地域一帯の僧団をわずか 1 年程の期間で「シンハラ派」に塗り替え、「パーリ語改革」を達成したと言わんばかりの語りになっている。彼らがスコータイに立ち寄ったことで彼地の僧団の関心を惹いたことはありうるであろうが、MS.CP の語りの如くであったかどうかについては疑問に思う。かなり話が盛られている可能性は否めないだろう。

第 17 章［MS［CP/T］. p.19；MS［CP/E］. p.94］では、Ñāṇagambhīra 師らがスコータイを去ってラプーン（ละพูน、＝ラムプーン）に向かったことが語られている。同師の立ち寄ったところではどこでも、多くの者が同師の衆徒の中で出家して学ぼうと来集した、と言う。彼らは、C.S.793 年（＝ B.E.1974 年、ルワン・カイ［ล้วงไก่］の年。A.D.1431 年）の太陰月 6 月の満月日にラプーンに到着した。翌 7 月の終わりにチエンマイの国王サームファンケーンがクーデターで殺され、8 月には王子 Lōk が国王に即位した。新たなチエンマイ国王（ティローカラート王）は、Ñāṇagambhīra 師がスリランカから戻ったことを知ると、大いに喜び、同師らをチエンマイに迎える準備を始めた。古い王宮の建物を建物を解体して、それを建材として同師の住居となる寺院 Rājamonthian（ราชมนเฑียร）[18] を建て始めるとともに、貴族高官 5 名を迎えの使者として遣わした、と言う。

この MS.CP 第 17 章で語られるラムプーン滞在の話は Jkm には見られないが、彼ら一行が帰路のルートとしてラムプーンを通り、そこに逗留した可能性は考えられることである。Jkm の C.S.794 年の出来事を語るところに “Haripuñjayaṃ paccāgantvā...”（※ Haripuñjaya：ラムプーン）［Jkm. p.94；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.132］とあるから、その可能性は極めて高いと言える。しかしながら、ラムプーン滞在中にチエンマイの国王が彼らの帰着を知って迎え入れる用意を始めたのかどうかは定かでない。

ところで、この第 17 章に登場するティローカラートは、Jkm では “Bilaka” と表記され酉年（kukkuṭa-vassa）の 32 歳の時にチエンマイ（Nabbisi-rājādhāni）において潅頂を得たと語られている［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.133］。この即位年は C.S.803 年（A.D.1441 年）と換算される［Cf. Jkm-tr［J/E］. p.133 *footnote*8］[19]。また、Bilaka 王の実父で前代の Tissa 王（サームファンケーン）は、息子に王位を委譲し

た後に 4 年生きて亡くなった、つまり殺されて王位を奪われたのではない、と語られている［Jkm. pp.94-95；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.133］。MS.CP の語りにおいて、C.S.793 年にサームファンケーン王が殺されてしまっていることや、またティローカラート王が彼らを迎え入れたことにしていることについては、目下のところその意図がよく分からないが、次の節で推論を示してみたい。

第 18 章［MS［CP/T］. pp.19-22；MS［CP/E］. pp.94-98］は、頭から 3 分の 1 程の箇所［MS［CP/T］. pp.19-20；MS［CP/E］. pp.94-96］がチエンマイ帰着から Wat Pā Däng に入るまでの語りになっている。それによると、チエンマイに帰着した Ñāṇagambhīra 師は、まず自分の〔もとの〕師匠（upajjhāya）であり Wat Suan Dòk 派の僧長である Dhammakitti 師のもとを挨拶に訪ねた。Dhammakitti 師は、Ñāṇagambhīra 師に賛辞を送った（師のもとを去ることについての賛辞と思われる）。そして、実際は恐らく Wat Suan Dòk 派の比丘らに対してであろうと思われるが、すべての僧らに Ñāṇagambhīra 師らのもとで授具足（บวช）を受けるよう呼びかけた。その結果、毎日多くの出家・在家の者が授具足を受けるためにやって来るようになり、彼らは住まう場所のことで難儀するようになった。このため、王妃はチエンマイの西側に Wat Pā Tān（วัดป่าตาลหลวง）[20] を建立したが、それでも不足であったので、Ñāṇagambhīra 師は国王に別の寺院を建立してくれるよう要請した。国王は、チエンマイ都の北西 1500 ワーのところにある “Pā Däng”（デーンの木の森）に寺院を建立し寄進することにした。この寺院は “Rattavanārāma” と名付けられ、住僧らは Siṅhalarattarāma 派 [21] と呼ばれた、と言う [22]。

この第 18 章での語りも Jkm には対応させられそうな箇所がない。前節で述べたように、Jkm では、スリランカ修学僧らがチエンマイに帰着した後は、ただたんに “Rattavanamahāvihāra” に入ったと述べているだけである。Jkm においては、“Dhammakitti” という師僧は登場しないし、帰着早々にチエンマイで授具足戒式が執行されたとする話もない。また、第 17 章での Rājamonthian も含め、Wat Pā Tān なる寺院が彼らの住処として建立されたという話もない。彼らの住処として “Rattavanamahāvihāra” という寺院には言及されているが、ティローカラート王が彼らのためにこの寺院を建立寄進したという語りもない。そもそも Jkm においては彼らが帰着した時はサームファンケーン王の治世期であるが、この王が修学僧らの住処を設えたという語りもない。MS.CP の語りには何らかの情報操作の意図すらあるのではないかとの感が否めないかたちになっ

ている。

4. Wat Pā Däng について

前節で、MS.CP におけるスリランカ修学僧たちの帰路における出来事の語りを、Jkm との相違を示しつつ概観したので、ここで前々節のところで筆者が疑問点として述べた、“Rattavanamahāvihāra” すなわち Wat Pā Däng とはどのような寺院であったのか、ということについて一考を加えてみたい。

繰り返しになるが、Wat Pā Däng 派の史書である Jkm は、同派の拠点寺院である Wat Pā Däng について何も語っていない。そこでは、Mahādhammagambhīra 師らがチエンマイに帰着した後、Wat Pā Däng に住まったということしか語られておらず、この寺院がいかなる寺院であったのかについては何も語っていない。さらに言えば、同師らがどのような経緯でこの寺院に入ったのかも説明されていない。このように Jkm が Wat Pā Däng について無言であるのに対し、MS.CP では、この寺院のことも、Ñāṇagambhīra 師らがその寺に住まうに至った経緯も、詳細に語られていた。

この両史書の語りの差異を、どのように見ることができるのであろうか。まずはこの点から考えてみたいが、ここで筆者は、Jkm における、彼らスリランカ帰りの比丘たちが “Rattavanamahāvihāra” に住まったという文の後の語りに着目する。

Jkm［Jkm. p.94；Cf. Jkm-tr［J/E］. pp.131-133］によると、彼らは “Rattavanamahāvihāra” に入った後、第 7 年目と第 8 年目の雨安居はこの寺でのみ過ごした。第 7 雨安居の年に当たる C.S.793 年の出来事は一切語られておらず、彼らのチエンマイ帰着後の活動について語り出されるのは C.S.794 年からである。そしてその活動はと言うと、① C.S.794 年に Khelaṅga（ラムパーン）都において太守 Sūra の支援により執行された最初の授具足戒式、②同年 Haripuñjaya（ラムプーン）において執行された第 2 回目の授具足戒式、③同年 Nāḷikerayāṅga 河畔 (23) で執行された第 3 回目の授具足戒式、④同年 Kumbhāmāpanna（ウィエン・クムカーム、Cf. Jkm-Ind. p.82）の川岸において Siridhammacakkavattinarinda（ティローカラート王）の兄 Bālisadeva 王子の支援により執行された第 4 回目の授具足戒式、⑤同年の入雨安居の時に「叔母の王妃」が建立させた Upari-ārāma (24) で執行された部分結界（khaṇḍa-sīmā）の結界式、⑥ C.S.795 年に Jayasena（チエンセーン）都で執行さ

れた授具足戒式、⑦同年 Jayasena の北西における Rattavanamahāvihāra の建立、⑧同年 Jaṃrāya（チエンラーイ）都で執行された授具足戒式、である。これらの諸活動は、その殆どまたはすべてが、チエンマイ都以外のところで行われており、しかも、サームファンケーン王自身が支援したとされるものは 1 つもない。Jkm では、⑧の後のこととして、〈…Tissa 王（※サームファンケーン王）の勅令がおよぶ王国において、僧団は何回も授具足戒式を行った。…〉と述べているが、国王が支援したのであればそのことを端折らずに述べたであろうから、それらの授具足戒式も同様であったと思われる。

余談であるが、Zinme. の「Wat Pā Däng 派史」でも Jkm と同じようなことが述べられている［Cf. Zinme. pp.45-46］。

Jkm のテキストには種々の問題が指摘されているので［Cf. 古山 2017. pp.327ff.］、あくまでも「現存の」しかも「PTS 本の」という限定辞を付けなければならないが、この Jkm における語り方から察するに、チエンマイのサームファンケーン王は、スリランカ帰りの比丘たちのことを顧慮していなかったのではなかろうか。Jkm には、チエンマイに入ろうとする彼らを国王が誰かに出迎えさせたとか、国王が彼らの帰着を喜んだといった話が見られないという点からも、そうしたことが察せられるだろう。Wat Suan Dòk 派など既存の僧派からの反感を恐れて何もせず放置したということも考えられるだろう。また、同王治世期の A.D.1400 年に入ってからはホー族の侵入が相次ぎ、その結果として王権も不安定化していたようである［Cf. C-Chronicle. pp.74ff.; C-Chronicle-tr. pp.117ff.］から（※最後は臣下の謀叛で退位させられている）、彼らスリランカから帰着した比丘たちに構っている余裕などなかったのかもしれない。

この推察のとおりであったのであれば、チエンマイに戻る彼らのために、サームファンケーン王が寺院を設えるというようなことはなかったのではなかろうかと思われる。となれば、Mahādhammagambhīra 師らがチエンマイに到着した後に住処とした “Rattavanamahāvihāra” というのは、既存の寺院であった可能性が考えられるのではなかろうか。

チエンマイにおいて国王の支援により執行された彼らの僧団儀式というのは、Jkm においては、続く第 24 章（Mahādhātucetiya-kathā）での、C.S.803 年にティローカラート王が即位したという語りの後にしか現れない。

ところで、MS.CP の語りにおいては、C.S.793 年にサームファンケーン王が殺されてしまっていた。そして、ティローカラート王が、チエンマイに帰着す

る Ñāṇagambhīra 師らを貴族高官らを遣わして出迎えさせ、しかも Wat Pā Däng などの寺院を建立し寄進したとされていた。もしかすると、MS.CP の編述者は、Jkm に見られるような伝承を知ってはいたが、それでは Ñāṇagambhīra 師らのチエンマイ帰着の場面を描くのに自派称揚の点で不都合を感じ、かと言って、Wat Pā Däng 派の形成過程の最初期に積極的に手を差し伸べなかったサームファンケーン王が何かをしたと語ることには納得がゆかなかったので、このような語りに仕立て直したのかもしれない。実際のところはどうか分からないが、このような想像も可能であろう。むろん、たんなる編述者の誤認である可能性はある。

先ほど、“Rattavanamahāvihāra” は既存の寺院であった可能性が考えられる、と述べたが、このことについて Hans Penth が Jkm-Ind. pp.224-227 の中で興味深い推論をおこなっている。

Hans Penth は、寺名の中の “Däng”（แดง デーン）という言葉はタイ語で “ไม้แดง”（マイ・デーン）または “ต้นแดง”（トン・デーン）と呼ばれる樹木を意味する（※本稿註（9）を参照せよ）、と述べた上で、少なくとも A.D.1930 年以降はこの寺院の辺りにこの樹木が見られないことから、寺名はこの地域に茂る樹木の名にちなんで付けられたものではなく、同名の他の寺院にちなんで付けられたものである、と言う。そして、George Cœdès の説に批評を加え [25]、また上述の MS.CP の語りを〈確証はないようである〉と述べて退け、Jkm の語り方と前方の文脈をもとに、〈…Wat Pā Däng は A.D.1430 年（※ C.S.792 年）に建立されていて、その名は他の araññavāsī の「母体寺院（*mother monastery*）」に由来する、もしかすると、A.D.1361 年に Sumana が滞在し何か（仏舎利？）を見せたところである（A.D.1359 年に建立された）Sajjanālaya の Wat Pā Däng に由来するのかもしれない〉との推論を示している。

斯くして結論的には筆者（古山）と同じく “Rattavanamahāvihāra” すなわち Wat Pā Däng というのは既存の寺院である可能性を推測するのであるが、Hans Penth は、さらに子細な推論を述べている。まず、この寺名は彼らスリランカで再授具足を受けた修学僧たちが創案したり独占的に用いたものではない、と述べて、次のように言う。Sumana 師がチエンマイに招聘されて “araññavāsī”（森林住派）と呼ばれる Wat Suan Dòk 派が成立した頃に、この派の僧たちが、Sumana 師の要請または自主的にチエンマイに寺院を建立し、寺名は Sajjanālaya など他のところにあった “Wat Pā Däng” に因んで付けられた。Mahādhammagambhīra 師らスリランカ修学僧たちというのは、もとはこのチエンマイの Wat Pā Däng

の住僧の「全員」または「大半」であり、スリランカから帰った後は “Sīhaḷa-bhikkhu” と呼ばれるようになったが、帰郷後はもといた寺院すなわち Wat Pā Däng に戻ることにした、と。

以上はあくまでも Hans Penth の推論である。Jkm の第 21 章 Sumanattherakathā には、Sumana 師は、チエンマイに招聘される以前のことであるが、Lideyya 王の意向で Sajjanālaya に赴き、Siripabbata という山の麓にあった Mahārattavanārāma に住まっていた、ということが語られている［Jkm. p.85；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.118］。Sajjanālaya にはタイ語で “Wat Pā Däng” と呼ばれる寺院があり Sumana 師の住処であったことが語られているわけであるが、このことはスコータイのいわゆる「ワット・パーデーン碑文」からも確かめられる（“Sumana” は “Samaṇa” と書かれているが）［Cf. Inscription9.］。故に、Ucchupabbata（ステープ山）の山麓に、チエンマイに来た Sumana 師が Sajjanālaya のそれを模して、あるいは彼の弟子たちが師の行跡を記念して、“Wat Pā Däng” なる名の寺院を建てたということは考えられなくはない。しかしながら、このチエンマイの Wat Pā Däng を、Sumana 師にちなんで建てられた寺院とした上で、Mahādhammagambhīra 師らのもとの住処であったとするためには、同師らが “araññavāsī” あるいは Wat Suan Dòk 派の比丘であったということを明らかにしなければならないだろう。MS.CP では Wat Suan Dòk 派の比丘として語られており（ただしもとの住処はチエンマイ都南郊の Wat Nantārām としている）、また、その所在地や名称（“vana” の語があること）からして “araññavāsī” の寺院であったのではないかと思われ、筆者（古山）は Mahādhammagambhīra 師らは “araññavāsī” あるいは Wat Suan Dòk 派の比丘であった可能性が高いだろうと思ってはいるのであるが、Jkm においては彼らの素性は一切語られておらず、この点から断ずるのには猶予がある。

ところで、この “Rattavanamahāvihāra” が既存寺院であったとして、しかもそれが空き寺でもなかったのなら、大勢の比丘がチエンマイに帰着してすぐさま大挙して居住し始めるなどということは、少なくとも何らかの縁がなければ難しいであろう。故にこの寺院を Mahādhammagambhīra 師らのもといた場所と考えることはできるであろうが、彼らの素性がはっきりしない状況では、ここを Sumana 師ゆかりの寺院とまで想定できるのかどうかは定かでない。さらに言えば、A.D.1930 年以降はさておき、今から 600 年またはそれ以上昔には、この辺りに「デーンの木」（ไม้แดง、ต้นแดง）が生い茂っていたのかもしれない。

ちなみに、Jkm の語りを見ると、この “Rattavanamahāvihāra” の整備や拡張事業の手が入るのは、ティローカラート王治世期初期の C.S.809 年以降のようである。C.S.803 年に即位した新王ティローカラートが彼らに肩入れを始めたため、その頃から Wat Pā Däng 派はようやく日の目を見るようになる。故に、この寺に Mahādhammagambhīra 師らが入ってから 20 年近くの間は、僧派の中心的な拠点ではあっても立派な寺院ではなかったと思われる。

5. むすび

以上が、Wat Pā Däng 派の史書である Jkm と MS.CP における、この僧派の形成過程の最初期についての語りであり、この派を成立せしめたスリランカ修学僧たちがチエンマイに到着した後に止住する場所となった、“Rattavanamahāvihāra” すなわち Wat Pā Däng についての語りに対する筆者の考察である。

彼ら修学僧たちはチエンマイの僧団の「パーリ語改革」を目指してスリランカへ旅立ち、彼地で再授具足を受けて故地へ戻った。しかし、一目散にチエンマイに向かったわけではなく、その帰路のルートの各地において再授具足戒式を執行した。チエンマイ帰着まで数年の歳月をこの活動に費やしている。しかし、この彼らの授具足戒式執行については、彼らが雨安居歴 10 年未満であったという点で非律の疑いが残るものである。Jkm には、帰郷に和尚資格もあるスリランカの 2 長老比丘を伴っていたことを仄めかす語りがあるが、これが非律性の疑いを回避するための作り話に過ぎないのか、実際にそうであったのか、については分からない。それが事実であれば、この僧派の形成過程の最初期 — 特に C.S.796 年までの時期 — というのは、スリランカ比丘との *collaboration* によって授具足戒式が執行され、彼らの存在によって僧派形成活動が支えられていたということになるであろう。もしそうでなかったのであれば、他の有資格の比丘が含まれていたということでもない限り、この最初期の僧派形成活動というのは如律性の怪しい僧団儀式によってなされたということになる。

Jkm によれば、彼ら修学僧たちは、チエンマイ帰着後、“Rattavanamahāvihāra” すなわち Wat Pā Däng に住まった。この寺院は、MS.CP では当時のチエンマイ国王（※ティローカラート王としている）によって建立寄進されたと語られているが、Jkm はいかなる寺院であるのかを一切語っていない。しかし、Jkm におけるチエンマイ帰着後の彼らの活動についての語りに目を移すと、当時の国王

サームファンケーンが支援したとされるものは 1 つもないようであり、このことから Wat Pā Däng はサームファンケーン王が彼らのために建立した寺院ではなく、この修学僧らがスリランカ渡航前に住まっていた既存寺院である可能性があるのではないかとの推論を示した。もしそうであれば、このスリランカ修学僧たちというのは、チエンマイに戻りはしたが、何らかの理由でサームファンケーン王の外護は受けられなかったということになるであろう。

それはさておき、この修学僧グループのリーダー格にして僧派成立の立役者とも言える Dhammagambhīra 師または Ñāṇagambhīra 師は、その後どうなったのであろうか。「むすび」の最後に、このことに触れて本稿を締めくくりたい。

Jkm では、上引の〈Mahādhammagambhīra 長老と Mahāmaṅgala 長老を上首とする彼ら諸長老たちは、Nabbisi 都に到着し、Rattavana-mahāvihāra に住まった。…〉というところでの言及を最後に、以後の語りからはこの僧の名が現れなくなる。C.S.794 年から始まる再授具足戒式執行などの語りにおいては、執行者は「彼ら」や「長老たち」「僧団」という表現になり、“Mahādhammagambhīra” という僧名に言及しなくなるのである。そして、C.S.803 年に、ティローカラート王が即位した後でこの王の支援により行われた、恐らく彼らがチエンマイで初めて執行した大規模な授具足戒式 (26) は、〈…Medhaṅkara・Ñāṇamaṅgala・Sīlavaṃsa 大長老を上首とする比丘僧団〉［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr［J/E］. p.134］が行ったと語られており、ここに彼ら修学僧のリーダー格であった “Mahādhammagambhīra” の名は挙げられていない。同師と共にスリランカへ出かけた他の長老たちの名 (27) があるのみである。

このような状況は、C.S.794 年から C.S.803 年までの間に、Mahādhammagambhīra 師が、何らかの理由で Wat Pā Däng を去ったか、あるいは死亡したからではなかろうかと推察する。その双方ということもあり得よう。「去った」のであれば、その理由は様ざまに考えられよう。「パーリ語改革」なりスリランカの流儀による僧団儀式執行法なりを可能な限り拡げたくて、チエンマイは他の仲間に任せて諸方巡錫に出たのかもしれない。あるいは、サームファンケーン王の外護がなく失望して他の土地に期待をかけて去ったのかもしれない。

Jkm が突然に Mahādhammagambhīra 師の名に言及しなくなるのには、何かを覆い隠そうとする意図があってそうしていることも考えられなくないので、チエンマイの Wat Pā Däng 派にとって不都合なり不名誉な出来事があったのかもしれない。例えば、同師が以前に Wat Suan Dòk 派に属していたのであったなら、かつてチエントゥンの Wat Yāng Kuang 派の僧らが「破和合僧の者」と非難し

た（※ MS.CP の語り。Cf. 古山 2020.）ように、チエンマイで早々に同様の難詰を受けて居づらくなった、あるいは追い出された、というようなことも考えられよう。そのような難詰においては、最初期の授具足戒式執行における雨安居歴のことが取り沙汰されたかもしれない。さらに言えば、Wat Pā Däng に止住する他の長老たち（例えば Medhaṅkara 師や Ñāṇamaṅgala 師）と軋轢が生じて出て行ったということも想像できなくはない。

MS.CP では、第 18 章において、C.S.802 年に Wat Pā Däng が完成すると、チエンセーンでの寺院建立事業を行い、C.S.805 年に Ñāṇagambhīra 師がチエントゥンへ、C.S.809 年にはチエンコーンへ、それぞれ出かけたことが語られている［MS［CP/T］. pp.20-22；MS［CP/E］. pp.96-98］。続く第 19 章［MS［CP/T］. pp.22-23；MS［CP/E］. p.99］では、C.S.811 年に Ñāṇagambhīra 師はラムパーンに招かれ、授具足戒式執行などを行いつつ 3 雨安居を過ごしたとし、C.S.814 年に、Wat Pothi（วัดโพธิ์）で 1 雨安居を過ごした後、ムアン・ポーティ（เมืองโพธิ์）に向けて出発したが、バーン・フアムアン（บ้านหัวเมือง）に到ると病気になり 3 日後に亡くなった、と語られている。また、土地の人びとがバーン・トンドーイ（บ้านต้นดอย）の東の山頂に塔廟を建立して同師の遺骨を収めた。かつて Wat Nantārām の住僧で、スリランカ修学に参加した Cittahanu 師がラムパーンにやって来たが、1 雨安居の滞在の後、還俗した、と言う。このように MS.CP では、Ñāṇagambhīra 師はチエンマイ帰着後 9 年程はチエンマイにいたが、その後の 12 年間は他の土地を巡錫しており、最期はその巡錫先で迎えた、と語られている。

MS.CP のこの語りは Jkm との乖離が大きく、俄かにはそのまま受け取ることができないが、Ñāṇagambhīra 師が旅の途中、とある村で亡くなった、というあたりは、所在地は不詳ながら具体的な地名を出して語っているので、ある程度信じても良いのかもしれない。

Wat Pā Däng 派成立の立役者とも言える、このスリランカ修学僧のリーダーのことについては謎が多いが、チエンマイに帰着して然程時を経ていない頃にチエンマイを離れたのかもしれない。そして、再びチエンマイに戻ることはなく、別の土地で旅に病み命終した。これが、この僧派の成立を導いた比丘の晩年ではなかったかと、ひとまず想像する。さらに考察を重ねてみたい。

本稿に使用した略記

C.S.：Cūla-sakkarāja（จุลศักราช：タイ小暦）　B.E.：*Buddhist Era*（พุทธศักราช：タイ仏暦）

B°：ミャンマー第 6 回結集版　BEFEO：*Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*

JSS：*The Journal of the Siam Society*　PTS：The Pali Text Society

参考・参照文献と略号

C-Chronicle.：อรุณรัตน์ วิเชียรเขียว, เดวิด เค. วัยอาจ, ed. *ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่*. B.E.2543. Chiang Mai：Silkworm Books, B.E.2547（Rep.）.

C-Chronicle-tr.：*The Chiang Mai Chronicle, Second Edition*. Trans. David Wyatt & Aroonrut Wichienkeeo. Chiang Mai：Silkworm Books, 1998.

Daniel2006.：Daniel M. Veidlinger. *Spreading the Dhamma , Writing , Orality , and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand*. Chiang Mai：Silkworm Books, 2006.

Inscription9.：A.B.Griswold & Prasert ṇa Nagara. 'Epigraphic and Historical Studies, No. 12 Inscription 9.'JSS 62.1（1974）：pp.89-127

Jkm.：A.P.Buddhadatta, ed. *Jinakālamālī*. London：PTS, 1962.

Jkm-Ind.：Hans Penth. *Jinakālamālī Index, An Annotated Index to The Thailand Part of Ratanapa--ñña's Chronicle Jinakālamālī*. Chiang Mai：PTS & Silkworm Books, 1994.

Jkm-tr［C/P］.：George Cœdès. '*Jinakālamālinī*（*Texte*）.'BEFEO 25（1925）：pp.36-72

Jkm-tr［C/F］.：George Cœdès. '*Jinakālamālinī*（*Traduction*）.'BEFEO 25（1925）：pp.73-149

Jkm-tr［J/E］.：Ratanapañña Thera. *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror, Being a Translation of Jinakālamālīpakaraṇaṃ*. 1968. Trans. N. A. Jayawickrama. London：PTS, 1978（Rep.）.

Kalyani-Isc.：Taw Sein Ko. *The Kalyānī Inscriptions Erected by King Dhammacetī at Pegu in 1476 A.D., Text and Translation*. Rangoon：The Superintendent, Government Printing, Burma, 1982.

KT-Isc.：A.B.Griswold & Prasert ṇa Nagara. 'An Inscription from Keng Tung（1451 A.D.）. 'JSS 66.1（1978）：pp.66-88

MS.：*ตำนานมูลศาสนา*. Nonthaburi：สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

MS［L/T］.：บำเพ็ญ ระวิน. *มูลศาสนา สำนวนล้านนา*（*LAN-NA MULASASANA*）：*รายงานการวิจัย*. Chiangmai：Faculty of Humanities Chiang Mai University, B.E.2539.

MS［CP/E］.：Sommai Premchit & Donald K. Swearer. 'A Translation of Tamnān Mūlasāsanā Wat Pā Daeng：The Chronicle of the Founding of Buddhism of the Wat Pā Daeng Tradition.'JSS 65.2（1977）：pp.73-110

MS［CP/T］.：*Tamnan-Mulasasana, Ttransliteration Series IX*. Trans. Sommai Premchit & Puangkam Tuikheo. Chiang Mai：Chiangmai University, 1976.

MS［P＋P］.：ประเสริฐ ณ นคร & ปวงคำ ตุ้ยเขียว. *ตำนานมูลศาสนาเชียงใหม่ เชียงตุง*. B.E.Bangkok：สมาคมประวัติศาสตร์ในพระราชูปถัมภ์ สมเด็จพระเทพรัตนราชสุดาฯ สยามบรมราชกุมารี, B.E. 2562（Rep.）

Ongsakul 2005.：Sarassawadee Ongsakul. *History of Lan Na*. Ed. Dolina W. Millar & Sandy Barron. Trans. Chitraporn Tanratanakul. Chiang Mai：Silkworm Books, 2005.

Penth1994.：Hans Penth. *A Brief History of Lan Na, Civilizations of Nothern Thailand. Chiang* Mai：Silkworm Books, 1994.

Penth2004.：Hans Penth. *A Brief History of Lan Na, Nothern Thailand from Past to Present*. Chiang Mai：Silkworm Books, 2004.

SHR-Chronicle.：สมหมาย เปรมจิตต์, ed. *ตำนานสิบห้าราชวงศ์, ฉบับสอบชำระ*（*The Sip-ha Rajawong Chronicle, Critical Edition*）. Chiang Mai：สถาบันวิจัยสังคม มหาวิทยาลัยเชียงใหม่（Chiang Mai University）, B.E.2540.

Y-Chronicle.：พระยาประชากิจกร. *พงศาวดารโยนก*. Nonthaburi：สำนักพิมพ์ศรีปัญญา, B.E.2557.

Zinme.：Sithu Gamani Thingyan. *Zinme Yazawin, Chronicle of Chiang Mai* . Ed. Tun Aung Chain. Trans. Thaw Kaung & Ni Ni Myint.Yangon：Universities Historical Research Centre, 2003.

中村 2015.：中村哲夫『タイ北部歴史伝説探訪 改訂版』、（私家版）、2015 年

古山 2017.：古山健一「Jinakālamālī について ―特に 1 つの難句をめぐって―」『駒澤大学仏教学部論集』第 48 号（2017 年 10 月）

古山 2019.：古山健一「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考」『駒澤大学仏教学部論集』第 50 号（2019 年 10 月）

古山 2020.：古山健一「Wat Pā Däng 派の成立に関する小考（2）」『駒澤大学仏教学部論集』第 51 号（2020 年 12 月）

L-Dict.：*พจนานุกรมภาษาล้านนา*, *The Lanna Dictionary*. Chiang Mai：สถาบันภาษา ศิลปะและวฒนธรรม มหาวิทยาลัยชภัฏเชียงใหม่, B.E. 2550.

NTh-Dict.：อรุณรัตม์ วิเชียรเขียว และคณะ. *พจนานุกรมศัพท์ล้านนา เฉพาะคำที่ปรากฏในใบลาน*, *The Northern Thai Dictionary of Palm-leaf Manuscripts*. Chiang Mai：Sikworm Books, B.E.2539.

タ日 .：冨田竹二郎編『タイ日大辞典』、日本タイクラブ・めこん、1997 年

タ辞 .：松山納『タイ語辞典』、大学書林、1994 年

註

（1）前稿でも述べているが、Wat Pā Däng（ワット・パーデーン）派とは、同派の伝承によれば、A.D.15c 前半のラーン・ナー王国サームファンケーン王（พญาสามฝั่งแกน）の治世期に、先行

のスリランカ系僧派である Wat Suan Dòk 派内での僧団儀式の朗誦等におけるパーリ語の “*orthoepy*” が問題となり、これを改めるため、Mahādhammagambhīra 師（Jkm の人名表記）または Mahāñāṇagambhīra 師（MS.CP の人名表記）らが、スリランカに留学して授具足戒式を受け直し、当時のスリランカにおけるパーリ語の “akkhara-paveṇi”（文字体系の慣用）と、これに沿った “pada-bhāṇa”（読）及び “sara-bhaññа”（誦）を学んでチエンマイに戻り、その流儀による僧団儀式を執行し始めたことによって出現した僧派である。

ちなみに Wat Suan Dòk（ワット・スワンドーク）派とは、A.D.14c 後半期のクーナー王（พญากือนา）の治世期に、Sumana 長老がスコータイ王国からチエンマイへ招聘されたことを契機に、同師が住まったチエンマイの Wat Suan Dòk を拠点として形成された僧派である。Sumana 長老の師匠であり、ミャンマー南部地域にいた、Udumbara 師が、スリランカ仏教の伝持者であると考えられることから、Wat Suan Dòk 派もスリランカ系僧派と見做されており、Wat Pā Däng 派とともに、タイ語で「ランカーウォン（ลังกาวงศ์ ＜ Skt. Laṅkāvaṃśa）」と呼び名され、また現代の欧米の学者らによっては “*Sinhalese school*” という概念で括られている。

このようにして A.D.15c のラーン・ナー仏教には 2 つの “*Sinhalese school*” と呼びうる僧派が並び立ったのであるが、両派に同じ呼称を与えただけでは混乱を来すので、区別がつく呼称にして各々を呼ぶようにしている。Hans Penth は、Wat Suan Dòk 派を “*the old or first Sinhalese school*” とし、Wat Pā Däng 派については “*new, later or second Sinhalese school*” と述べている［Penth2004.p.74ff.］。古山 2019. でも述べいるように、Wat Pā Däng 派は、自派には “Sīhaḷa-saṅgha” や “Sīhaḷa-gaṇa”、“Sīhaḷavaṃsika” といった呼称を与えているが、Wat Suan Dòk 派にそうすることは決してない（※ Jkm での語り）。自らこそがスリランカ仏教の真っ当な伝承者であるとの気負いが強く、Wat Suan Dòk 派を “*Sinhalese school*” とは認めない立場に立っている。また、前 2 つの拙稿で述べたように、Wat Suan Dòk 派の僧団儀式には、まったく無効となりかねないような不審な点があるとの見方を懐いている（※ MS.CP での語り）。Wat Suan Dòk 派への批判意識や対抗心が強く、〈Wat Pā Däng 派は頑固で傲慢な傾向があり Wat Suan Dòk 派を公然と批判する〉と評されている［KT-Isc. p.67］。

(2) *Jinakālamālī* の仔細については古山 2017. を参照されたい。

(3) 古山 2020. で詳しく述べたが、“*Mūlasāsanā*（ตำนานมูลศาสนา）” なる表題を有するラーン・ナー地域撰述の仏教史書は単一ではなく、同名の複数のテキストが存在しており、それらの諸テキストは大概 3 つの系統に大別することができる。すなわち、①チエンマイの Wat

Suan Dòk 派系（ฝ่ายวัดสวนดอก เชียงใหม่）、②ミャンマー・チエントゥンの Wat Pā Däng 派系（ฝ่ายวัดป่าแดง เชียงตุง）、③同チエントゥンの Wat Yāng Kuang 派系（ฝ่ายวัดยางควง เชียงตุง）の 3 種である。ここで用いる Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*（*ตำนานมูลศาสนา ฉบับวัดป่าแดง*）というのは②に属するテキストである。チエントゥンの Wat Pā Däng 派とは、Mahāñāṇagambhīra 師がまだ存命中であった C.S.806 年（A.D.1444 年頃）に、チエントゥン国王の要請によりその弟子である Somacitta 師ら 5 名の僧がチエントゥンに派遣され、C.S.810 年（A.D.1448 年頃）に同地にあった "Wat Pā Däng" という名の寺院の布薩堂で授具足戒式を開始したことで生まれた僧派であり、チエンマイの Wat Pā Däng 派の分脈で支系に当たるものである。ゆえに、この Wat Pā Däng 版 *Mūlasāsanā*（MS.CP）は、〔広義における〕Wat Pā Däng 派文献と言って差し支えない。

なお、本稿で原典として用いている MS.CP は、前 2 つの拙稿での場合と同じく、1976 年にチエンマイ大学から刊行された、Sommai Premchit らによる現代タイ文字への翻字テキスト（MS［CP/T］.）である。なお、この翻字本には章区切りが付されており、全体が 23 の章に分かたれ、各章には章題も付けられている。この MS［CP/T］. は英訳されている。それは 1977 年に JSS 誌に掲載された Sommai Premchit と Donald K. Swearer の共訳による英訳（MS［CP/E］.）である。訳者自身が "...the translation is not literal one."（p.74 *footnote2*）と述べている如く（原テキストに混乱があるため仕方がない）、達意訳的なものであるが原典を読解するのに参考になるので、これまでと同様に、積極的に利用する。なお、Sao Sāimöng Mangrai が、1981 年にミシガン大学東南アジア研究センター（University of Michigan Center for South East Asian Studies）から、*Michigan Papers on South and Southeast Asia* の Volume 52 として、*"The Pāḍaeng Chronical and the Jengtung State Chronical Translated"* と題するチエントゥン年代記類の英訳研究書を世に出しているが、残念ながら筆者（古山）はいまだ初版も再版も入手できていないため目下は参照できない。

上述した 3 系統のテキストを網羅したものに、Prasert ṇa Nagara らによる MS［P＋P］. がある。ここには、チエンマイの Wat Muang Māng（วัดเมืองมาง）の貝葉写本から現代タイ文字に翻字したチエンマイの Wat Suan Dòk 派系テキスト、ラムパーンの Wat Bupphārām Bān Uean（วัดบุพพารามบ้านเอื้อม）の貝葉写本から翻字したチエントゥンの Wat Pā Däng 派系テキスト、ラムパーンの Wat Bān Uean（วัดบ้านเอื้อม）の貝葉写本から翻字したチエントゥンの Wat Yāng Kuang 派系テキストが収載されている。この MS［P ＋ P］. は筆者の手元にあるため、必要に応じて参照する。

(4) PTS 本 Jkm のテキストは "... Mahādhammagambhīra-Mahāmaṅgalatthera-pamukhā ..." であり、2 人目の長老の名は "Mahāmaṅgala" となっている。しかしながら、George Cœdès による

Jkm-tr[C/P]. では、2 人目の長老の名は “Mahāmedhaṅkara” となっている（p.50）。Jkm-tr[J/E]. の脚注によると、ダムロン親王による Jkm のバンコク本（1908 年刊）では、“Mahāmaṅgala” の部分は “Mahāmedhaṅkara” となっているとのことで、Jkm-tr [J/E]. はこちらを採っている（p.131）。Jkm-tr [C/P]. も恐らくはこの「バンコク本」にしたがっているのであろう。「バンコク本」とは、いわゆる「ダムロン親王本」のことであり、問題のあることが指摘されている。このようなテキストの表記は、それがどのような「権威」があったとしても、手放しで採用するわけにはゆかない。慎重な検討と議論が必要かと思うのであるが、Jkm-tr [C/P]. も Jkm-tr [J/E]. も、何故に当該箇所を “Mahāmedhaṅkara” とすべきなのかについては特に何も述べてはいない。Jkm では、“Mahāmedhaṅkara” は、スリランカ修学を決意したとされる 25 名の大長老リストの中で “Mahādhammagambhīra” の次にその名が挙げられてはいる［Cf. Jkm. p.92］。いわば「序列第 2 位」に位置付けられている。このような状況からすると、ここは “Mahāmedhaṅkara” であるのが自然であるように思えなくないのであるが、しかし、大長老リストでの名の順序を別のところにもそのまま当て嵌めることができるのかどうか疑問も感じる。今は PTS 本 Jkm の表記のままに書いておくと同時に、“Mahāmaṅgala” は、Mahādhammagambhīra 師とともにスリランカへ渡った他の僧、例えば “Ñāṇamaṅgala” 師の名の誤伝写である可能性もあるのではないかという問題提起をしておきたい。

(5) Daniel2006. は、Jkm において Mahādhammagambhīra 師らが何らかの典籍をもたらしたということを語っておらず、授具足戒式を受けて帰郷したことだけを語っていることについて、実際には彼ら修学僧たちが仏典を持ち帰っていたのだとしても、授具足戒式こそが Jkm が述作された時点での僧院の歴史における将来的発展性のある諸々の出来事（*the seminal events*）のうちの 1 つであるから、Jkm においては授具足戒式のことだけがとりあげられてのである、ということを述べている（p.73）。Jkm が仏典などを請来したことを語っていないのは、1 つには実際に空手還郷で帰って来たからなのかもしれないし、いま 1 つにはただたんに態々語っていないだけのことなのかもしれない。

(6) なお、東南アジア地域にスリランカ僧団を確立するために、スリランカで修学した東南アジア地域出身の比丘が他地域出身の比丘を伴って帰郷し、その比丘らとの *collaboration* によって授具足戒式を執行しようとするというのは、それほど特異なことではないようである。例えば、よく知られたミャンマーの「カルヤーニー戒壇碑文」（A.D.1476 年）の第 1 柱表面（*Obverse Face of the First Stone*）によれば、A.D.12c 後半期に、ミャンマー・バガン王国にスリランカ仏教の移植を目指して同地に渡り修学した Chapaṭa 師は、同地での授具足の後、10 年滞在して三蔵・註釈を学習し、「長老認定

(thera-sammuti)」を得てから帰郷の途に就いたが、その際に、ミャンマーで僧団儀式執行のことを考えて「五群比丘僧団」を整えるために、インド及びスリランカ出身の長老比丘 4 名を伴っている（Cf. Kalyani-Isc. pp.5ff.；高島淳・澤田英夫『東南アジアのインド古典語碑文選―チャム文字・モン＝ビルマ文字編』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006 年 pp.53ff.）。Chapaṭa 師の例は、授具足戒式執行が可能な現前僧団を成立させるための頭数あわせでそうしたのであり、Mahādhammagambhīra 師らの場合は和尚を確保するためと思われるが、どちらも有効な授具足戒式を執行するために他国比丘に同道を求めたというところは同じである。

(7)「Parama 王」とは、アユタヤ王朝の「ボーロムマラーチャーティラート 2 世王」（สมเด็จพระบรมราชาธิราชที่ 2、在位：A.D.1242-1448）、すなわちサームプラヤー王（เจ้าสามพระยา）を指すようである［Cf. Jkm-tr［J/E］. p.131 *footnote* 1］。なお、パーリ語の “Parama” は、タイ字に綴ってタイ語で読むと「ボーロムマ（บรม）」となる。

(8) この “Syāma-vaṃsa” という言葉は、いわゆる「エメラルド仏」の来歴譚を語る Jkm の第 26 章 “Ratanapaṭimā-kathā”（宝石仏像の話）［Jkm. pp.98-103；Cf. Jkm-tr［J/E］. pp.139-145］の中で “Kamboja-vaṃsa” 及び “Arimaddhana-vaṃsa” という語と共に現れるものである。複合語後分の語 “-vaṃsa” は「人種」や「民族」を意味し（※ Jkm-tr［J/E］. は “*race*” と訳している）、前分の語はそれぞれ人種や民族の固有名となっている。“Syāma” はタイ語の “สยาม”（サヤーム）という語をパーリ語的に綴ったものであり、タイ系民族を指す（※詳しくは、例えばチット・プーミサック著、坂本比奈子訳『タイ族の歴史―民族名の起源から―』、井村文化事業社［発行］・勁草書房［発売］、1992 年を参照されたい）。当該の Jkm の第 26 章の語りの中で、「エメラルド仏」が移動した “Syāma-vaṃsa” のムアンとして言及されるのは、アユタヤ、カムペーンペット、チエンラーイ、チエンマイ、ランパーンである。ラーン・ナー地域からアユタヤに至るまでの、いわゆるチャオプラヤー流域にあったタイ系民族の諸ムアンが “Syāma-vaṃsa” のムアンとして括られている。

(9) “Rattavanamahāvihāra” は、＜ ratta ＋ vana ＋ mahā ＋ vihāra ＞というように分解できる 4 語から成る合成語である。“วัดป่าแดงหลวง”（ワット・パーデーン・ルワン）というタイ語の寺名を、パーリ語に逐語訳した（วัด → vihāra、ป่า → vana、แดง → ratta、หลวง → mahā）のがこの “Rattavanamahāvihāra” のようである。ただし、“แดง”（デーン）の語はたんに「赤い」を意味する語なのではなく、これは “ไม้แดง”（マイ・デーン）または “ต้นแดง”（トン・デーン）と呼ばれる、心材が硬くて赤い樹木（学名：*Xylia xylocarpa*、*Xylia kerii*）のことを指していると言う［Cf. Jkm-Ind. p.224］。この解釈にしたがうならば、“Rattavanamahāvihāra” は「赤い森の精舎」（*Red Forest Monastery*）ではなく、「赤木の森の大精舎」（*Redwood*

Grove Monastery）という意味になる。なお “Wat Pā Däng Luang” は “Wat Pā Däng” と略称される。

（10）MS［CP/T］. では、カット・ラオ［กัดเล้า］の年に当たる C.S.791 年を B.E.1971 年と記しているが、これは間違いである。このことは MS［CP/T］. 及び MS［CP/E］. の注記の中でしっかりと指摘されている。C.S.791 年は B.E.1972 年とすべきであろう。

（11）ここに登場するアヨーティヤー王の Paramarājādhirāja（บรมราชาธิราช、タイ語読み：ボーロムマラーチャーティラート）とは、Jkm に登場する「Parama 王」（上記註（7）参照）と同一人物を指すと考えられる。

（12）この Dhammagambhīra 師というのは、「ソムデット（สมเด็จ）」という最高位の尊称が付き、王師（ราชครู = P.rājaguru）という極めて高い地位にあったアユタヤの長老比丘で、MS.CP においては、Ñāṇagambhīra 師のスリランカ渡航に便宜を図った人物として登場する［Cf. 古山 2019. p.264；古山 2020. p.244］。Jkm には登場しない人物である。Jkm では、“Dhammagambhīra” といえばスリランカ修学僧のリーダー格であった比丘の名である。

（13）この「13 名」の内訳はよく分からない。なお、Ñāṇagambhīra 師らスリランカ修学僧の数は 12 名である。この 12 名にアユタヤの王師 Dhammagambhīra 師が加わったのだろうか。

（14）この “อัตถบาลี” という言葉は MS.CP の随処に現れるが、精確な意味は残念ながら筆者にはよく分からない。MS［CP/E］. では “...the *dhamma-vinaya*（*attha-pāli*）...”（p.93）と訳されているが、英訳にはこの訳に対する解釈の根拠が特に示されてはおらず、何故に「法と律」と解すことができるのか分からず、筆者には疑問が残る。

ところで、“อัตถ” はパーリ語の “attha” に由来する語であり、“บาลี” のほうは同じく “pāli” であろう。如何様にも解すことができる厄介な複合語である。ただし、MS.CP における Ñāṇagambhīra 師の活躍というのは、僧団の「パーリ語改革」を果たすべくスリランカ修学を経て比丘らの使用するパーリ語の発音を（スリランカの慣習に合せて）矯正する（再授具足はその一環）、という目的に沿って語られているように思うので、このような大文脈に照らし合わせて解釈するならば、Trailoka 師が尋ねた “อัตถบาลี” というのはこれと関連すること、換言すればパーリ語の発音に絡む事柄を指しているのではないかと想像される。

“อัตถ” と同語源・同義の〔北部〕タイ語 “อัตถะ” には、「語音」（ศัพท์ < Skt. śabda：音声）という意味がある［Cf. L-Dict. p.617b］ので、“อัตถ-บาลี” は「パーリ語の語音」または「聖典の語音」という意味なのではないかと思う。ただし、*Kaccāyana-byākaraṇa* の 1.1 によれば「“attha” は字音から知られる（attho akkhara-saññāto）」とされるので、この “อัตถ” をパー

リ語として考えるならば「音」というよりは「音から知られること」と解したほうが良いのかもしれない。故にさらに検討を重ねる必要があるが、今はひとまず「語音」と解しておきたい。

(15) この "อัตถะพยัญชนะ" という言葉についても、上の註で述べた "อัตถบาลี" と同様に、精確な意味は詳らかではない。やはり "อัตถะ" はパーリ語の "attha" に由来する語であり、"พยัญชนะ" のほうは同じく "vyañjana ／ byañjana" である。問題は "อัตถะ" の語義であるが、"อัตถบาลี" の場合と同じように「語音」（ศัพท์ ＜ Skt. śabda）という意味で解することができるのであれば、"พยัญชนะ" は「字句」の意であるから（※タイ語では特に「子音」という意味で使われるようであるが）、"อัตถะพยัญชนะ" は例えば「字句の語音」などと訳すことができるのではなかろうか。検討の余地は残るが、今はこのように理解しておきたい。なお、MS [CP/E]. は "...practice (*attha-byanjana*) ..." (p.93) と訳している。しかし、やはりこの解釈についてのコメントはない。なお、MS [CP/T]. におけるこの語のある文を見ると、"...ก็รู้แห่งอัตถะพยัญชนะ อันตนได้ปฏิปทามาบ่แม่นว่า..." (p.18) となっている。これは〈…อัตถะพยัญชนะ のところで、自らが実践してきたところが適切でないと知り…〉といった文意であるが、このことから、"อัตถะพยัญชนะ" は "*practice*" ではなく、実践の中身におけるある事柄を指していることが知られ、故に MS [CP/E]. の訳はあまり適切ではないように思う。筆者は、この文を、Trailoka 師がこれまでの僧団儀式の執行などにおいて朗誦してきたパーリ語のうち、字句の発音法が適切でなかったことに気が付いた、という意味ではないかと考える。

(16) "ขอบแม่นอัตถธัมมวินัย" という言葉の中の "อัตถ" についても、註（14）及び（15）の場合と同様に、ひとまず「語音」（ศัพท์ ＜ Skt. śabda）という意味で解しておきたい。ここでは "อัตถ" の語に "ธัมมวินัย"（＜ P.dhamma-vinaya）という語が後接されている。

(17) *Nikhādanagaṇṭhi* や *Upasampadagaṇṭhi* が如何なる典籍であるかは筆者には目下不詳である。ただし、MS.CP の語りにおける Ñāṇagambhīra 師らがスリランカを発つ直前にスリランカの僧団から受けた訓誡の言葉の中に、*Nikhādanasaddā* という典籍の名が挙げられている［Cf. MS [CP/T]. p.16；MS [CP/E]. p.90］。古山 2019. p.263 にそのあらましを述べてある。上記 2 書のうち *Nikhādanagaṇṭhi* というのはこの *Nikhādanasaddā* を指しているのかもしれない。

(18) この Rājamonthian (ราชมนเฑียร) とは、チエンマイ旧市街（城壁内）の北西側にあり、現在は寺名が "วัดราชมณเฑียร" と綴られている寺院を指すようである［Cf. 中村 2015. pp.138-141］。

(19) ちなみに『チエンマイ王朝年代記』を見ると、C-Chronicle. では同王の即位年を、C.S.804 年の 34 歳の時であると述べおり［C-Chronicle. p.78；C-Chronicle-tr. p.122］、SHR-Chronicle. でも同じことが述べられている［SHR-Chronicle. p.61］。＜ Zinme. は C.S.825 年

としている（p.31）＞。『ヨーノック年代記』は C.S.804 年である［Y-Chronicle. p.328］。

(20) 現在、チエンマイ国際空港の北東側のエリアに数ケ寺の廃寺遺構があるが、そのうちの 1 つに Wat Pā Tān（วัดป่าตาล）と呼ばれているものがあり、ティローカラート王治世期の建立とされている。MS.CP の語りに現れる Wat Pā Tān（วัดป่าตาลหลวง）は、この寺院のことであるのかもしれない。

(21) 原文は “สิงหรามาปักขะ”（Siṅharāmapakkha）であり、ここには誤写か誤植があると思われる。MS［CP/T］. p.22 の 23 行目に “สิงหลรัตตรามาปักขะ”（Siṅhalarattarāmapakkha）とあり、本来はこのように書かれていたものと考える。意味のよく分からない言葉であるが、恐らく「シンハラの Rattavanārāma 派」というような意味ではなかろうか。

(22) MS.CP 第 18 章では、この後、さらにチエンマイでの寺院建立などの語りが続く。国王は、毎年寺院を建立し、その数は総計 500 ケ寺に及んだと言う。また、Dhmmakitti 師を瞑想に適したチエンマイ都の西方の丘〔の寺院〕に招き、Wat Monthian にはスリランカから持ち帰った仏像を安置し、菩提樹と三蔵は Wat Pā Däng に寄贈した。また、Wat Pā Däng 派の寺院統治体制を整え始め、Ñāṇagambhīra 師は Wat Monthian に、Medhaṅkara 師は Wat Pā Tān に配置し、Candaraṅsī 師は Wat Pā Däng の長に任命し、Rattanāga 師はチエンマイ南郊にある Wat Nantārām に配置するとともに 4 ケ寺の監督権を与えた、と言う。この直後の語りが C.S.800 年の出来事であるので、この年までにこの初期の同派における寺院統治体制がつくられたということなのであろう。

(23) この「Nāḷikerayāṅga 河畔」については、Jkm-Ind. において “*not identified*” とされているが、Hans Penth は、同じ年の第 2 回の授具足戒式がランプーンで行われ、第 4 回が恐らくウィエン・クムカームで行われていることから、ラーンプーン・チエンマイ地域のピン川にあった船着場か浅瀬ではないか、とコメントしている（p.134）。なお、Jkm-Ind. の同所では、Dhanit Yupho の “Nāḷikerayāṅga-tittha” の意味を “Thā Phrāo Yāng” すなわち “Coconut Palm and Yāng Tree Landing” であるとする説を紹介している。ちなみに Zinme. では、Muang Pao の “Yang Pao quarter” であると述べている（p.46）。

(24) この “Upari-ārāma” は、Jkm-Ind. において “*not identified*” とされている（p.199）。Jkm-tr［J/E］. の脚注には、Dhanit Yupho の “Wat Bon situated to the North” とする説が示されている（p.132 *footnote* 7）が、筆者には詳らかではない。Zinme. では、ウィエン・クムカームの北側にあった寺院と述べられている（p.46）。

(25) George Cœdès は、“Rattavana” という寺名は、スリランカの僧団王にして、Jkm では “Vanarata” と呼ばれている、A.D.1424 年に 25 名のチエンマイ僧の再授具足を主宰した Vanaratana 師の名を捩ったものではないか、と述べていると言う。しかし、Hans Penth は、

George Cœdès は「カルヤーニー戒壇碑文」の話と混同して勘違いしているとして批判する。この碑文なかで和尚（僧団王ではないとも指摘）として言及されているのは Vanarata-mahātheraであり、この僧はJkmで言及されているA.D.1424年に〔Mahādhammagambhīra 師らの再授具足で〕羯磨阿闍梨を務めた Vanarata-mahāsāmi とは異なるとしている。Hans Penth は寺名解釈自体の是非については何も述べていない。

George Cœdès は、“Vanarata” をひっくり返して “Ratavana” とし “Rattavana” になったというようのなことを述べているそうであるが、はたして斯くして寺名が決まったのであろうか。ちなみに、George Cœdès が手がけた Jkm-tr [C/P]. では、Mahādhammagambhīra 師らの再授具足で羯磨阿闍梨（kammavācācariyā）を務めた mahāsāmi の名は “Vanarata” となっている（p.50）が、PTS 本 Jkm では “Vanaratana” である（p.93）。George Cœdès の寺名解釈は “Vanarata” であれば成り立つかもしれないが、“Vanaratana” であれば不可能である。それに、そもそもこの寺の名を Mahādhammagambhīra 師らが付けたのかどうか分からない。故に荒唐無稽の解釈と評すべきだろう。

(26) この授具足戒式は Binga 川（※ピン川）の Mahāsṭhāna という川岸で行われた。なお、この Mahāsṭhāna であるが、Jkm においてこの授具足戒式の後に語られている Sūrasīha 大長老の再授具足はチエンマイの Mahāsṭhāna で行われた、と述べられているので［Jkm. p.95；Cf. Jkm-tr [J/E]. p.134]、チエンマイにあった川岸と考えられる。Jkm-Ind. が “*not identified*” と述べているように（p.31）、所在地がどこかは不詳である。Jkm-Ind. によればタイ語で “Thā (...) Luang” と呼ばれるような場所、Jkm-tr [J/E]. の脚注によれば同じく “Sthān Luang” と呼ばれる川岸であるとのことである。

(27) なお、ここで「上首」としてその名が挙げられる長老のうち、Medhaṅkara 師は、以後のチエンマイ Wat Pā Däng 派の発展の礎を築いた長老である。この授具足戒式の数年後には、ティローカラート王から “Atulasaktyādhikaraṇa-mahāsāmi” の称号が贈られ、名実ともにこの僧派の長となった。ティローカラート王が一時出家した際には阿闍梨を務めており（※和尚は Ñāṇamaṅgala 師）、また、この王からは布薩堂の建設寄進を受けるなどしており［Jkm. pp.96-97；Cf. Jkm-tr [J/E]. pp.135-138]、国王の信頼が篤かったようである。

〈キーワード〉Wat Pā Däng 派、*Mūlasāsanā*、*Jinakālamālī*、Dhammagambhīra、Ñāṇagambhīra